



U B E 株式会社

2023 年度第 1 四半期決算説明会

2023 年 8 月 4 日

イベント概要

[企業名]	U B E 株式会社
[企業 ID]	4208
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	決算説明会
[イベント名]	2023 年度第 1 四半期決算説明会
[決算期]	2023 年度 第 1 四半期
[日程]	2023 年 8 月 4 日
[ページ数]	16
[時間]	18:00 – 18:47 (合計：47 分、登壇：24 分、質疑応答：23 分)
[開催場所]	インターネット配信
[登壇者]	1 名 取締役 執行役員 CFO 石川 博隆 (以下、石川)

登壇

司会：投資家の皆様、こんばんは。本日はお忙しい中、UBE 株式会社の決算説明会にご参加いただきまして、ありがとうございます。

これより取締役執行役員 CFO、石川博隆より、2023 年度第 1 四半期連結決算について、約 25 分間ご説明申し上げた後、質疑応答を行います。会議全体の時間は 45 分間を予定しております。

説明会を始めます前に、皆様にお断り申し上げます。これから行う説明におきまして、現時点の予想に基づく将来の見通しを述べる場合がございますが、それらは全てリスクならびに不確実性を伴っています。実際の結果が見通しと異なる場合があることを、あらかじめご了承ください。

それでは、説明を開始いたします。石川 CFO、よろしくお願いいたします。

2023年度 第1四半期決算概要

UBE / UBE株式会社

連結対象会社

項目	2022年度末 (A)	2023年度 第1四半期末 (B)	増減 (B) - (A)	摘要
連結 子会社数	36社	36社	0社	
持分法 適用会社数	15社	15社	0社	
計	51社	51社	0社	

3

石川：皆さん、こんばんは。CFO の石川です。本日はお忙しいところご出席くださいまして、ありがとうございます。それでは早速ですけれども、説明を始めます。資料に沿ってご説明いたします。

まずは、3 ページ目です。連結対象会社数ですが、この第 1 四半期末では連結子会社が 36 社、持分法適用会社が 15 社、合計 51 社となりました。22 年度末から変化はございません。

環境要因

項目			2022年度 第1四半期 (A)	2023年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)	
為替レート		円/\$	129.6	137.4	7.8	
資材 価格	ナ フ サ	CIF	\$/ t	949	693	△ 256
		国産	円/KL	86,100	67,300	△ 18,800
	ベンゼン (ACP)		\$/ t	1,227	938	△ 289
	豪州炭 (CIF)		\$/ t	393.8	216.5	△ 177.3
			円/t	51,018	29,741	△ 21,277

4

続きまして、4 ページ目です。環境要因です。

この23年度第1四半期では、為替レートは137.4円となり、7.8円の円安でした。資材価格につきましては、ナフサ、CIFベースで693ドルとなり、前年同期比で256ドル下落いたしました。ベンゼンにつきましては、ACPで938ドルとなり、289ドル下落いたしました。豪州炭につきましては、CIFで216.5ドルとなり、177.3ドル下落いたしました。

なお、こちらはあくまでも指標であり、当社が実際に使用している原料のコストとは異なりますのでご注意ください。

主要項目

(単位：億円)

項目	2022年度 第1四半期 (A)	2023年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高	1,162	1,092	△ 70	△ 6.0%
営業利益	44	26	△ 17	△ 39.8%
経常利益	15	53	38	252.0%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	50	37	△ 13	△ 26.3%

(注) 2022年度第4四半期連結会計期間において、セメント関連事業の企業結合に係る暫定的な会計処理の確定を行いました。2022年度第1四半期に係る各数値については、暫定的な会計処理の確定の内容を反映させています。

5

続きまして5ページ目、主要項目でございます。

この第1四半期では、売上高は1,092億円、前年同期比で70億円、6.0%の減収となりました。営業利益につきましては26億円、前年同期比では17億円、39.8%の減益となりました。経常利益につきましては53億円、前年同期比では38億円、こちらは252%の増益となりました。

親会社株主に帰属する四半期純利益は37億円、前年同期比では13億円、26.3%の減益となりました。

セグメント別 売上高/営業利益

(単位: 億円)

	セグメント	2022年度 第1四半期 (A)	2023年度 第1四半期 (B)	差 異 (B) - (A)	増減率
売上高	機能品	153	158	5	3.5%
	樹脂・化成品	714	603	△ 111	△ 15.6%
	機械	203	206	2	1.2%
	その他	156	189	33	21.4%
	調整額	△ 65	△ 64	0	-
	計	1,162	1,092	△ 70	△ 6.0%
営業利益	機能品	28	30	2	7.8%
	樹脂・化成品	19	△ 16	△ 35	-
	機械	4	9	5	150.3%
	その他	7	9	2	36.9%
	調整額	△ 14	△ 6	8	-
	計	44	26	△ 17	△ 39.8%

6

続きまして、6 ページ目です。セグメント別の売上高/営業利益です。セグメント別にそれぞれご説明いたします。

機能品ですが、売上高は 158 億円、前年同期比では 5 億円、3.5%の増収です。営業利益につきましては 30 億円、前年同期比で 2 億円、7.8%の増益となりました。こちらのセグメントの主力製品はポリイミド、分離膜、セラミックスですが、いずれも好調でございました。

続きまして樹脂・化成品ですが、売上高は 603 億円、前年同期比で 111 億円、15.6%の減収でした。営業利益はマイナスの 16 億円となり、35 億円の減益でした。このセグメントにつきましては、特にラクタム、ナイロンポリマーの業績悪化が減収減益の要因となっております。なお、エラストマーにつきましては好調に推移し、増収増益の要因となっておりますけれども、やはりラクタム、ナイロンポリマーの悪化が大きく影響しております。

機械セグメントは売上高が 206 億円、前年同期比で 2 億円、1.2%の増収でした。営業利益は 9 億円、前年同期比では 5 億円、150.3%の増益となりました。こちらの部門で増益となりましたのは、製鋼部門においてスクラップ価格の下落により、利ザヤが改善したことによるものです。

その他セグメントは売上高が 189 億円、前年同期比では 33 億円、21.4%の増収でした。営業利益は 9 億円、前年同期比では 2 億円、36.9%の増益となりました。こちらの主な要因は、昨年 12 月にエーピーアイコーポレーション社を買収したことによる効果でございます。

差異分析 全社

(単位：億円)



7

ここからは差異分析となります。まずは7ページ目、全社でございます。

売上高は70億円の減収、営業利益は17億円の減益となりました。

セグメント別については、前ページと同じですので省略させていただきます。

定性情報について、まずは売上高でございますけれども、全社で見ますとその他のところに記載している通り、エーピーアイコーポレーションを連結子会社化したことが増収要因ではありますが、やはり樹脂・化成品において需要減退に伴うナイロンポリマー、カプロラクタムの販売数量減少、および販売価格の下落の影響が大きく、減収となりました。

営業利益につきましても、主な要因は樹脂・化成品です。今申し上げました要因と同じでございます。

それから、営業利益の差異分析でございますが、全社で見ますと価格差はプラスの5億円、数量差がマイナスの5億円、固定費差はマイナスの17億円となりました。固定費ほかのマイナス17億円は、主に樹脂・化成品から生じております。

差異分析 機能品

(単位：億円)



8

続きまして8ページ目、機能品セグメントでございます。

こちら売上高は5億円の増収、営業利益は2億円の増益となりました。

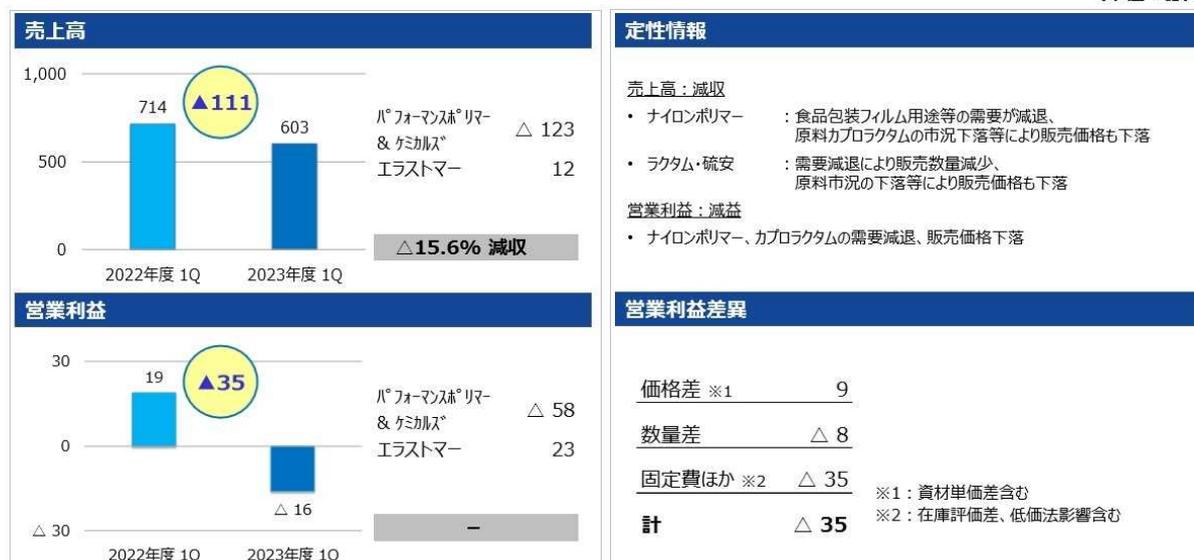
定性情報ですが、売上高につきましてはポリイミドが有機ELパネル向けのワニスの販売が好調でした。それから、分離膜につきましてはバイオガス関連用途を中心に、需要が好調に推移したことが主な要因です。

営業利益の増益要因につきましては、売上高と同様、ポリイミド、分離膜の販売が好調に推移しました。

営業利益の差異分析ですけれども、価格差はプラスの4億円、数量差はマイナスの3億円、固定費ほかで2億円となっております。

差異分析 樹脂・化成品

(単位：億円)



9

続きまして9ページ目、樹脂・化成品です。

売上高は111億円の減収、営業利益は35億円の減益となりました。

サブセグメントで見ますと、パフォーマンスポリマー&ケミカルズが123億円の減収要因、エラストマーが12億円の増収要因となりました。

また、営業利益につきましては、パフォーマンスポリマー&ケミカルズが58億円の減益要因、エラストマーが23億円の増益要因となりました。

定性情報について、売上高の減収要因でございますけれども、ナイロンポリマーは食品の値上げに伴い食品包装フィルム用途などの需要が減退し、また原料カプロラクタムの市況下落等により販売価格も下落しました。それからラクタム・硫安につきましても、需要減退により販売数量が減少し、そして原料市況の下落等により販売価格も下落しました。

営業利益の減益につきましては、ナイロンポリマー、カプロラクタムの需要減退、それから販売価格の下落が主な要因となっております。

営業利益差異ですが、価格差がプラスの9億円です。内訳を見てまいりますと、マイナスとなっておりますのがカプロラクタム、ナイロンポリマーです。エラストマーはプラスとなっております。数量差はマイナス8億円です。こちらはナイロンポリマーがマイナスで、工業薬品がプラスです。固定費ほかでマイナス35億円ですが、こちらはほぼ大半が在庫評価によるものです。

差異分析 機械

(単位：億円)



10

続きまして、機械セグメントです。

こちらは売上高が2億円の増収、営業利益は5億円の増益でございます。

定性情報ですが、売上高の増収要因として、成形機で自動車産業向けの販売が堅調でした。それから製鋼、電炉の鉄でございますが、こちらは需要減退により販売数量は減少いたしました。

営業利益は増益です。こちらは製鋼部門において原料のスクラップ価格が下落し、利ザヤが改善したことによるものです。

営業利益差異は、機械部門の限界利益3億円とのみ記載させていただいております。機械部門は個別受注生産のため、価格差、数量差の差異分析を行っておりませんので、このような記載とさせていただきます。

差異分析 その他

(単位：億円)



11

続きまして、11 ページです。その他セグメントです。

売上高は 33 億円の増収、営業利益は 2 億円の増益となりました。

サブセグメントで見ますと、売上高につきましては医薬が 51 億円の増収、電力が 6 億円の増収です。営業利益につきましては、医薬が 7 億円の増益、電力が 1 億円の増益となっております。

定性情報としましては、売上高の増収要因は、医薬事業でエーピーアイコーポレーションを連結子会社化したことです。こちらは昨年 12 月の買収ですので、昨年度の第 1 四半期には連結子会社化されておりません。今回は 3 カ月間連結化されております。

その次が電力ですけれども、こちらは自家発電所の余剰電力の売電量が増加しました。前期は第 1 四半期に宇部地区で点検を行い、発電所が止まっていた期間がありました。そのため今期は余剰電力が増え、売電量が増加しております。

営業利益の増益要因は、エーピーアイコーポレーションを連結子会社化したことです。

続きまして、営業利益差異でございます。価格差はマイナス 9 億円です。こちらは電力が大半を占めております。電力価格が下落しているということです。数量差は、先ほどのご説明のとおり電力がプラスとなっております。固定費ほか 9 億円のプラスです。こちらは医薬、電力ともにプラス要因がございます。

営業利益～四半期純利益

(単位：億円)

項目	2022年度 第1四半期 (A)	2023年度 第1四半期 (B)	差異 (B) - (A)
営業利益	44	26	△ 17
営業外損益	△ 28	27	55
金融収支	8	2	△ 6
持分法投資損益	△ 39	23	62
うちUBE三菱セメント株に係る持分法投資損益	△ 42	24	66
為替差損益	10	8	△ 2
その他	△ 7	△ 6	1
経常利益	15	53	38
特別損益	73	△ 3	△ 76
税金等調整前四半期純利益	88	51	△ 38
法人税等・非支配株主利益	△ 39	△ 14	25
親会社株主に帰属する四半期純利益	50	37	△ 13
1株当たり四半期純利益	51.17円	37.66円	△ 13.51円

(注) 2022年度第4四半期連結会計期間において、セメント関連事業の企業結合に係る暫定的な会計処理の確定を行いました。2022年度第1四半期に係る各数値については、暫定的な会計処理の確定の内容を反映させています。

12

続きまして12ページ、営業利益から四半期純利益までのご説明です。

営業利益は26億円です。営業外損益が27億円のプラスとなっております。こちらは前年同期比でプラスの55億円です。

主な内訳を見てまいりますと、金融収支は2億円、前年同期比でマイナス6億円となっております。主に、受取配当金の減少によるものです。

持分法投資損益23億円となり、62億円の増益要因でした。内訳を記載しておりますが、UBE三菱セメントに係る持分法投資損益が24億円と、前年同期比で66億円のプラスとなっております。こちらについては後ろのページに記載しておりますので、そちらで少しご説明したいと思います。

UBE三菱セメント

■UBE三菱セメント(株) 連結損益計算書

(単位: 億円)

項目	2022年度 第1四半期	2023年度 第1四半期
売上高	1,297	1,479
営業利益	△79	94
経常利益	△74	98
親会社株主に帰属する 四半期純利益	△97	45

■UBE(株) 持分法投資損益

持分法による投資利益 (損失)	△42	24
-----------------	-----	----

- 国内セメント事業は、第1Qの販売数量は減少したが、昨年度より取り組んでいる追加値上げ、および事業構造改善や安価熱エネルギーの使用拡大等の収益改善策を推進した。今年度黒字化達成を目指す。
- 米国事業は、前年第4Qの天候不良により滞っていた工事が再開され、第1Qの生コン販売数量は大幅に増加。値上げ効果も相俟り大幅な増収増益となった。
- 通期予想は、当初想定を据え置き。

■UBE三菱セメント(株) 定量情報

項目	2022年度 第1四半期	2023年度 第1四半期
セメント (国内総需要) (万t)	918	858
セメント (国内) 販売数量 (万t)	226	206
セメント (米国) 販売数量 (万st)	50	49
生コン (米国) 販売数量 (万cy)	184	202
一般炭価格 (参考指標) (\$/t)	373	161
ドル為替レート (円/ドル)	130	137

※ 上記一般炭価格は参考指標であり、実際の調達価格とは異なる。

(参考) 2023年6月末 連結貸借対照表

(単位: 億円)

総資産	7,792	有利子負債	2,031	自己資本	3,325
自己資本比率	42.7%	D/Eレシオ	0.61倍		

22

22 ページをご覧ください。こちらに UBE 三菱セメント社の第 1 四半期決算をまとめております。主なところのみ、ご説明いたします。

この第 1 四半期、売上高は 1,479 億円となりました。営業利益は 94 億円で、前年同期比で 173 億円のプラスです。経常利益は 98 億円で、前年同期比で 172 億円のプラスです。親会社株主に帰属する四半期純利益は 45 億円で、前年同期比で 141 億円のプラスとなっております。

主な要因は、このページの左下に記載しております。国内セメント事業につきましては、第 1 四半期の販売数量は減少しておりますが、昨年度より取り組んでおります追加値上げ、および事業構造改善や、石炭のことですけれども安価熱エネルギーの使用拡大等の収益改善策を推進した、これらの効果が表れたものです。

また、海外の米国事業につきましては、前年第 4 四半期に天候不良により滞っていた工事が再開され、この第 1 四半期の生コンの販売数量が大きく増加しました。

こういったことを主な要因として、前年同期比で大きな増益となっております。

右側に販売数量や石炭価格などを記載しております。この中で少しコメントさせていただきますと、米印に「上記一般炭価格は参考指標であり、実際の調達価格と異なる」と記載しております。この一般炭価格として記載しております 373 ドル、161 ドルにつきましてはあくまでも指標であり、実際のコストではありませんのでご注意ください。

それでは、もとのページに戻っていただければと思います。12 ページです。

これらの要因により、経常利益につきましては53億円となり、前年同期比で38億円の増益でした。

特別損益はマイナス3億円となりました。前年同期比では76億円の減益となります。こちらは前年同期にはセメント関連事業を分割したことに伴いまして、持分変動利益プラス83億円が発生しております。そのため前年同期の特別損益はプラスの73億円となっております。この特殊要因のため、特別損益は大きな減益要因となっております。

以上から、親会社株主に帰属する四半期純利益は37億円となり、前年同期比では13億円の減益でした。

貸借対照表

(単位：億円)

項目		2022年度末 (A)	2023年度 第1四半期末 (B)	差異 (B) - (A)
資 産	流動資産	2,831	2,768	△ 63
	固定資産	4,494	4,571	77
	合計	7,327	7,341	14
負 債	有利子負債	2,181	2,192	10
	その他負債	1,329	1,225	△ 104
		3,511	3,417	△ 94
純 資 産	自己資本*	3,616	3,720	104
	非支配株主持分他	200	204	4
	計	3,816	3,924	108
負債・純資産合計		7,327	7,341	14

*「自己資本」…純資産から新株予約権と非支配株主持分を除外したもの

(注) 2023年度第1四半期連結会計期間において、医薬品受託製造会社の企業結合に係る暫定的な会計処理の確定を行いました。2022年度末に係る各数値については、暫定的な会計処理の確定の内容を反映させています。

13

続きまして13ページ、貸借対照表でございます。

総資産は7,341億円、22年度末対比では14億円増加しております。こちらにつきましては、この3カ月ではあまり大きな変化は起こっていないと思っております。

純資産は自己資本が104億円増加しております。増加の主な要因につきましては、この四半期の純利益、それから円安に伴う為替換算調整勘定が、主な要因となっております。

キャッシュ・フロー計算書

(単位：億円)

項目	2022年度 第1四半期	2023年度 第1四半期	
A.営業活動によるCF	162	71	税金等調整前四半期純利益 51 減価償却費 64 運転資金の増減 △41 他
B.投資活動によるCF	2	△ 81	有形・無形固定資産の取得 △81 他
フリー・キャッシュ・フロー (A+B)	164	△ 10	
C.財務活動によるCF	△ 144	△ 40	有利子負債の増減 5 配当金の支払 △45 他
D.現金及び現金同等物の増減 (含、換算差額等)	△ 381	△ 41	
E.現金及び現金同等物の四半期末残高	406	266	

(注) 2022年度第4四半期連結会計期間において、セメント関連事業の企業結合に係る暫定的な会計処理の確定を行いました。2022年度第1四半期に係る各数値については、暫定的な会計処理の確定の内容を反映させています。

14

14 ページ目、キャッシュ・フロー計算書です。

営業キャッシュ・フローは71億円となりました。前年同期が162億円でしたので、キャッシュインが92億円減少しております。主な要因は、やはり利益の減少によるものと考えております。

投資キャッシュ・フローにつきましては、81億円のキャッシュアウトとなりました。前年同期がプラスの2億円ですので、キャッシュアウトとしましては83億円増加したことになります。前年同期のプラスの2億円ですが、昨年4月にセメント関連事業を分割してUBE三菱セメントへ移管する際に、関連するグループ会社に貸し付けていた資金を前年度の第1四半期に回収した金額がございます。こちらが83億円ございまして、そのために前年度の第1四半期はプラスの2億円となっております。これがなければ、今年度と同じぐらいのキャッシュアウトになっているということです。

以上からフリー・キャッシュ・フローは、この第1四半期ではマイナスの10億円となりました。

最後に、現預金は266億円となりました。手元資金の管理を厳格に行い、通常300億円ぐらいを目安としておりますが、今期では300億円を切るぐらいの水準で着地いたしました。

第1四半期のご説明としては以上です。今回、こういった業績ではございますけれども、上期の予想、通期の予想は変更しておりません。

私からのご説明は以上です。

質疑応答

【機能品について】

Q1：ポリイミド、分離膜、セラミックスなど主力製品は好調との説明にもかかわらず数量差が△3億円となっている理由は何か。

A1：数量だけで見ると対前年度で減少している製品がいくつかあるため。

Q2：前年度 4Q から 1Q にかけて売上高/営業利益とも約 10 億円の増収/増益だが、要因は何か。

A2：ポリイミドは前年度 4Q を底に回復している。フィルムはパネルメーカーの稼働が回復した。ワニスではスマホのフレキシブル OLED 比率が増加した。分離膜は引き続き好調を維持している。セラミックスも堅調だが、現在ほぼフル稼働のため、上記二つに比べると伸び幅は小さい。セパレータは、自動車減産の影響があり、民生向けも需要が低迷し、若干の減収となった。

【樹脂・化成品について】

Q3：数量差△8億円の内訳は。また、エラストマーの増益要因は何か。

A3：数量差△8億円は主にパフォーマンスポリマー&ケミカルズによるもの。エラストマーの増益は価格差が主因。

Q4：1Q から 2Q、および年間の見通しはどうか。

A4：カプロラクタムは秋冬にかけて繊維向け需要が戻ってくる。ナイロンポリマーは最近ではインド向けの輸出が多くなっていて、これも今後需要期に入る。また、下期にかけて車の生産等が回復すれば、関連する事業も徐々に回復に向かうと見ている。

【機械、その他について】

Q5：成形機が好調とのことだが、産機は前年同期と同水準であったという理解で良いか。

A5：その通り。

【UBE 三菱セメントについて】

Q6：1Q 営業利益（94 億円）はすでに通期予想（250 億円）に対して 4 割ほどの進捗だが、その要因は何か。また年間での見通しはどうか。

A6：北米事業において、前年度 4Q に天候不良によって滞っていた生コンの出荷が 1Q に再開されたことが大きな要因。国内でのコストダウン等も一部影響している。一方、内需がやや力強さに欠け、物流費も高騰しており、また先述した北米の増益は一過性のものであるため、年間の見通しは据え置いている。

Q7：北米事業における生コン出荷再開は、通期予想に織り込まれていなかったのか。

A7：織り込まれていなかった。

Q8：1Q の増益を国内事業と北米事業に分けるとどうか。

A8：国内事業も北米事業も改善している。また石炭鉱山に係る豪州事業も貢献している。

Q9：国内におけるセメント値上げの進捗は。

A9：7 月時点でほぼ全てのユーザーから満額の回答を得ており、概ね予定どおり進捗している。

Q10：国内事業と北米事業それぞれの今後の見通しは。

A10：国内事業は予定通り値上げを進めていく。北米事業では、天候不良解消に伴う効果は 2Q にはなくなると見ている。

以上